



Title	中国語圏におけるサハリン樺太史研究：庫頁島中国固有領土論・山丹貿易・日本帝国植民地
Author(s)	中山, 大将
Citation	北方人文研究, 13, 165-170
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77252
Type	departmental bulletin paper
File Information	13_12_Nakayama.pdf



中国語圏におけるサハリン樺太史研究： 庫頁島中国固有領土論・山丹貿易・日本帝国植民地

中山大将
(釧路公立大学)

はじめに

中国語圏で刊行されたサハリン樺太史研究の動向についてはすでに拙稿¹⁾によって論じているが、そこでは「庫頁島（サハリン）中国固有領土論」が中心であったため、本稿では「山丹貿易」「日本帝国植民地」という観点も交えて解説を行なう。

本稿執筆にあたっては、下記の文献検索サイトを用いた。

- (1)国史館図書查詢系統 <http://library.drnh.gov.tw/webpacIndex.jsp>
- (2)台湾期刊論文索引系統 <http://readopac.ncl.edu.tw/nclJournal/>
- (3)HyRead 台湾全文資料庫 <http://www.hyread.com.tw/>
- (4)中国知網 (CNKI) <http://gb.oversea.cnki.net/Kns55//>
- (5)上海図書館 <http://www.library.sh.cn/>

検索して得られた文献は、非学術的な一般雑誌の記事を除外すると 49 件であった。中華民国と中華人民共和国両地域出身者や在住者による研究でも両地域外で刊行されたものは対象外としている。また、本稿では読者の便宜を考え、簡体字、繁体字も常用漢字に統一した。本稿中の [] でくくられた数字は表「中華民国および中華人民共和国で刊行されたサハリン樺太史研究文献」の中の文献番号を指す。

1. 庫頁島中国固有領土論

「庫頁島中国固有領土論」とは、サハリンは中国の固有の領土だとする主張であり、その根拠として主に挙げられるのは、(1)『山海経』（紀元前 4 ～紀元 3 世紀）、(2)『敕修奴兒干永寧寺記』（1413 年）、『重修永寧寺記』（1433 年）、(3)北京条約（1860 年）である。(1)はサハリン島と推定できる島嶼が記載されている最古の文献として、(2)は明朝がサハリン島の住民を服属させた記録として、(3)はサハリン島を含むウスリー江以東の領有権がロシアによって不当に奪われた無効の不平等条約として言及される傾向がある。

近代中国でもっとも早く書かれたサハリン島の地誌は、中華民国で 1929 年に刊行された石榮璋『庫頁島志略』[1] である。同書は、1970 年、1994 年にも復刻されており、「庫頁島中国固有領土論」の重要古典として位置付けられている。

1) 中山大将「中華民国および中華人民共和国におけるサハリン樺太史研究：台湾と大陸における庫頁島中国固有領土論の系譜」『近現代東北アジア地域史研究会 News Letter』第 29 号、2017 年。

サンフランシスコ講和条約で日本が樺太の領有権を放棄することが決まると、中華民国の歴史家の陶元珍が樺太は中華民国へ返還されるべきだとする短文〔2〕を発表した。その2年後に、陸軍軍学校の教員などを歴任した王蘇も中華民国のサハリン島の領有権を主張する文章〔3〕を発表した。この〔2〕と〔3〕に共通するのは、北京条約に触れていないということである。王蘇はさらに1975年に、庫頁島中国固有領土論を主眼とする著書〔5〕を世に出す。

中華人民共和国において研究者が執筆したサハリン島関連の著作が発表されるのは、中華民国でこの王蘇の著書が出されてからであった。その最も早い例は、1979年に発表された耿良の論文〔6〕であり、『山海経』などを論拠に「地理の発見の歴史から見て、中国は最も早くサハリン島を知った国家である」と述べている。その2年後、薛虹はソ連の歴史学者²⁾のロシア帝国サハリン島発見先占説への反論を発表する〔7〕。

このように、1980年前後に中華人民共和国でも「庫頁島中国固有領土論」が登場するものの、中華民国側の研究が参照された形跡は見られず、同じ中国語圏であっても国際情勢から研究交流圏は分断されていたことがうかがえる。なお、この耿良と薛虹の論文は後の文献でも繰り返し引用されることとなる（〔15〕〔23〕〔24〕〔28〕〔38〕）。

1990年代に入ると、中華人民共和国では、史華が、ソ連の研究者がロシア人のサハリン到達時期を従来から4年早めて1640年としたことに反駁し、「歴史上、サハリン島は我が国〔引用者注：中華人民共和国〕の領土の一部であることは、ロシアで17～19世紀に作製された地図からも明らかなのである」と述べている〔21〕。

それ以前にすでに刊行されていた文化人類学関係の論文群と合わせてみても、冷戦期の中華人民共和国におけるサハリン島史研究は、ソ連史学を参照しており、冷戦構造の反映がうかがえる。また、東北三省に所在する研究機関に所属する研究者たちが、サハリン島史研究を担っていることも理解できる。

中国語圏における「庫頁島中国固有領土論」はポスト冷戦期にも見られる言説である。2010年代に入ると、中華人民共和国では、李東旺が、「1860年に清が北京条約を締結してから1929年に石榮璋が『庫頁島志略』を編纂するまでの間に、屈辱の歴史はあっという間に霧散して忘れ去られてしまっていたのだ!」と述べ〔40〕、柳成棟は「歴史を鑑とし、現代中国人として我々が歴史の悲劇を繰り返すことを避けるために祖国の領土を護ることは中国人ひとりひとりの責任なのである」と主張している〔42〕。ともに、石榮璋『庫頁島志略』（1929年）を参照している。中華民国では、王輔羊が、サハリン島は、ニコラエフスク、ウラジオストク、ハバロフスク、江東六十四屯に並ぶロシアに奪われた〈失地〉のひとつという歴史観を披歴している〔38〕。

これらの背景に考えられるのは、2012年の日本政府の尖閣国有化や南シナ海島嶼領有権問題の緊迫など、中国語圏における領土ナショナリズム再燃である。ただし、注意を要するのは、「庫頁島中国固有領土論」は、〈反日〉的論調ではなく、常に反ソ連、反ロシアの立場を伴うということである。また、興味深いのは、『山海経』よりも確かな史書であり、永寧寺記よりも時代的には古いはずの『元史』における記述について触れられることがほとんどないということである。これは『元史』の中のモンゴル帝国によるサハリン島の「吉里迷」や、大元ウルス（元朝）による「骨嵬」の服属を「庫頁島中国固有領土論」の根拠にしてみれば、「サハリン島モンゴル固有領土論」を惹きしかねない

2) 参考文献の漢訳書誌情報から次の文献と思われる。Князева, К. И. (отв. ред.) *Сахалинская область: сборник статей*, Южно-Сахалинск: Сахалинское книжное изд-во, 1960.

ためとも想像できる。

2. 山丹貿易・蝦夷錦

前記のような領土ナショナリズム的な論稿とは一線を画した実証的なサハリン島史研究として楊暘による蝦夷錦についての諸論文がある [26] [28] [32]。楊暘が蝦夷錦研究を始めた契機は、1988年に中村和之が楊暘の著書を書評したことで交流が始まったことであった。1996年には、土井徹と中村和之が楊暘の蝦夷錦研究を和訳して発表している³⁾。楊暘は「中国東北地区の歴史と文化：明清時代東北アジアのシルクロードと蝦夷錦の研究」(1996年、東洋文庫)で日本へ招聘され2ヶ月余り滞在し、学術交流や研究調査、講演を行なった。2008年に菊池俊彦と中村和之によって編まれた論文集には、中国語の既刊論文 [32] の和訳論文が収録された⁴⁾。

なお、楊暘の研究は、北東アジアの一地域としてサハリンを取り扱っているため、論題にサハリンの語が含まれていなくても本文中では言及されている場合があるが、本稿ではそこまでは網羅できていない。

楊暘の研究は、1980年代末からの日本と中華人民共和国との間での学術交流の成果のひとつとしてのサハリンの前近代史研究交流である。

3. 日本帝国植民地研究

中華民国での新たな研究動向として、楊素霞と劉淑如の研究を挙げることができる。楊素霞は、日本帝国植民地としての樺太と台湾の比較史研究の観点から、樺太の植民地経営について樺太研究史を先行研究にした日本語論文を刊行している [39] [45] [49]。劉淑如は、植民地比較文学論として台湾と樺太との比較研究を行なっているほか、日本語でもまだ先行研究の皆無に等しい北樺太文学研究も手がけている [46] [47] [48]。

両者の経歴に眼を向けると、楊素霞は神戸大学で2004年に博士号を取得した後に政治大学日本語文学系副教授に、劉淑如は北海道大学で2006年に博士号を取得した後に宜蘭大学外国語文学系助理教授に就任しており、ともに日本でも樺太関連の論文を発表している⁵⁾。

中華人民共和国では、黒龍江省社会科学院東北アジア研究所副研究員の杜穎がサハリン残留・帰

3) 楊暘「明代の東北アジアシルクロードと文化現象としての蝦夷錦」(土井徹・中村和之訳)『北海道立北方民族博物館研究紀要』第5号、1996年。原題は、楊暘「明代東北亜線網之路与“蝦夷錦”文化現象」『社会科学戦線』1993(1)。

4) 楊暘(西川和孝訳、杉山清彦、中村和之校閲)「永寧寺碑文と北東アジア：奴児干都司と黒龍江下流域・サハリンの先住民族との関係を中心に」菊池俊彦、中村和之編『中世の北東アジアとアイヌ：奴児干永寧寺碑文とアイヌの北方世界』高志書院、2008年。

5) 楊素霞『初期台湾統治における漢族系住民統治と拓殖務省問題：「内地」大手新聞を対象に』(神戸大学大学院文学研究科博士学位論文、2004年)、同「日露戦争期における「北進日本」史観の特徴」『植民地文化研究』(第11号、2012年)、同「日露戦後における植民地経営と樺太統治機構の成立：日本政府内部の議論からみる」『立命館大学 社会システム研究』(第32号、2016年、<http://hdl.handle.net/10367/7298>)、同「日露戦後における北方政策の可能性とその挫折：北海道内の北海道・樺太合併論を通じて」『立命館大学 社会システム研究』(第36号、2018年、<http://hdl.handle.net/10367/10683>)、劉淑如『「台湾の少女」の誕生：日本統治期の台湾人作家黄氏鳳姿に関する研究』(北海道大学文学研究科博士学位論文、2006年)、同「異民族ロマンスのポリティックス：冬木愚の樺太小説「和人」試論」『日本近代文学会北海道支部会報』(第20号、2017年)。なお、本シンポジウム後に、楊素霞『北海道と植民地台湾・樺太との行財政的関係を軸として(1895～1914)』(政大出版社、2019年)が刊行されたことを書き添えておく。

国日本人を主題にした研究を発表している[37][41]。分量としては少ないながら、サハリン残留・帰国日本人を論題に入れた研究としては最も早いものであると言える。ただし、内容としては、中国残留孤児の中国人養父母の道徳性、中国社会の寛容さの比較対象としてサハリン残留・帰国日本人が扱われている側面があることは否めない。

4. 参照されているサハリン樺太史関連日本語文献

中国語文献の中で、どのような日本語文献が参照されているのかを確認しておく。1945年以前刊行の文献としては、間宮林蔵、小川運平、岡栄、鳥居龍蔵、和田清、宮崎雷八の著作と樺太庁刊行物が挙げられる⁶⁾。

1945年以後、1980年代までに刊行された文献としては、洞富雄、西鶴定嘉、ジョン・ステファンの著作、1990年代以降の文献としては、菊池俊彦、三木理史、中山大將などの研究成果が中国語圏でも参照されている⁷⁾。

5. さいごに

サハリン島を中国の固有の領土として主張する「庫頁島中国固有領土論」は、中華民国と中華人民共和国において繰り返し現われており、その背景として領土ナショナリズムが挙げられる。また、反ソ連/ロシア言説の一角とも位置付けることができる。

山丹貿易・蝦夷錦の研究は、楊暘と中村和之、菊池俊彦らによる1980年代末からの日本と中華人民共和国との学術交流の成果として位置付けることができる。

日本帝国植民地研究としての樺太史研究は、2000年代以降に現われた、日本の大学での学位取得者による日本の学界と直接接続した研究であり、植民地台湾との比較研究の形を取る場合が多く、国際的な日本帝国植民地研究の一環として位置付けられる。

日露韓の各国語圏に比べれば、数は少ないかもしれないが、中国語圏においても決して無視できないようなサハリン樺太史研究の蓄積があることを本稿は示せたものと思う。

6) 樺太庁『樺太沿革史』(樺太庁、1925年)、同『樺太施政三十年史』(樺太庁、1936年)、小川運平『満洲及樺太』(博文館、1909年)、同『日本ト大陸』(北嶺学会、1923年)、岡栄『北カラフト』(興文社、1942年)、鳥居龍蔵『黒龍江と北樺太』(生活文化研究会、1943年)、宮崎雷八『樺太史物語』(櫻華社、1944年)、和田清『東亜史論叢』生活社、1943年)など。

7) 菊池俊彦『北東アジア古代文化の研究』(北海道大学図書刊行会、1995年)、ステファン、ジョン・J(安川一夫訳)『サハリン：日・中・ソ抗争の歴史』(原書房、1973年)、中山大將『帝国崩壊による樺太・サハリンをめぐる人口移動の形態および移動後の社会と経験』蘭信三編『日本帝国崩壊後の人口移動と社会統合に関する国際社会学的研究』(科研中間報告書、上智大学、2010年)、西鶴定嘉『樺太の歴史』(国書刊行会、1977年)、洞富雄『樺太史研究』(新樹社、1956年)、三木理史『移住型植民地樺太と豊原の市街地形成』『人文地理』(第51巻3号、1999年)、同『国境の植民地樺太』(塙書房、2006年)。

表 中華民国および中華人民共和国で刊行されたサハリン樺太史研究文献

番号	形態	刊行地	分野	筆者・翻訳者	刊行年	論文記事名（原著・原著者名）／書籍名	掲載誌（巻号）／刊行者
[1]	書籍	大陸	史	石栄璋	1929	庫頁島志略	石栄璋
[2]	随想	台湾	史	陶元珍	1954	庫頁島法律地位	新中国評論 (第6卷第6期)
[3]	随想	台湾	史	王蘇	1956	庫頁島中国領土考	黄埔月刊 (第55期)
[4]	書籍	台湾	史	石栄璋	1970	近代中国史料叢刊 庫頁島志略 合河政紀	文海出版社
[5]	書籍	台湾	史	王蘇	1975	庫頁島中国領土考略	王蘇
[6]	随想	大陸	史	耿良	1979	庫頁島の地理発見	学習と探索 (1979年第2期)
[7]	論文	大陸	史	薛虹	1981	庫頁島在歴史上帰属問題	歴史研究 (第5期)
[8]	論文	大陸	史	吕光天	1982	明清之際黒龍江下游及庫頁島の少数民族	社会科学輯刊 (1982年第6期)
[9]	随想	台湾	史	劉繼湘	1983	庫頁島	文藝復興 (148期)
[10]	翻訳	大陸	民	李堅尚（訳）	1983	庫頁島南部西北海岸阿伊努人の薩満教（E・O・蒂爾尼）	民族訳義 (1983年第2期)
[11]	論文	大陸	史	佟永功 関嘉録	1984	乾隆朝对黒龍江下游及庫頁島地区管轄一例	歴史档案 (1984年第1期)
[12]	論文	大陸	史	劉遠図	1985	庫頁島異名考	社会科学戦線 (1985年第4期)
[13]	翻訳	大陸	民	馮維欽（訳）	1986	阿穆爾河下游和薩哈林島各民族的經濟共同特征（A・B・ス莫良科）	黒河学刊（地方歴史版） (1986年第4期)
[14]	翻訳	大陸	民	馮季昌（訳）	1987	阿穆爾下游及薩哈林島各民族伝統の冬季交通工具（A・B・ス莫良科）	黒龍江民族叢刊 (1987年第4期)
[15]	概説	大陸	近	林治華	1987	日本和俄国爭奪庫頁島の闘争初探	佳木斯師專學報 (社会科学専版) (1987年第2期)
[16]	論文	大陸	文	諸雙清	1987	非俄羅斯の俄羅斯：評契訶夫的《薩哈林旅行記》	鉄道師院學報 (1987年第1期)
[17]	翻訳	大陸	史	姚鳳（編訳）	1988	并入俄国后的遠東（黒龍江流域・浜海辺区・庫頁島） 民族（17～20世紀）（《蘇聯遠東民族（17～20世紀）》）	黒龍江民族叢刊 (1988年第1期)
[18]	翻訳	大陸	民	馮季昌（訳）	1988	下阿穆爾及薩哈林島各民族的夏季交通工具（A・B・ス莫良科）	黒龍江民族叢刊 (1988年第2期)
[19]	論文	大陸	史	叢佩遠	1989	元代庫頁島の諸民族	民族研究 (1989年第4期)
[20]	翻訳	大陸	史	楊茂盛（訳）	1990	黒龍江沿岸、浜海地区和庫頁島居民の民族成分和民族歴史 (責任編輯 И.С.古爾瓦奇)	黒河学刊 (1990年第1期)
[21]	論文	台湾	史	史華	1991	庫頁島俄名薩哈林的由来 ：十七至十九世紀俄人繪製の庫頁島地圖研究	大陸雜誌 (第83卷第3期)
[22]	論文	大陸	史	王傑物、李鳳樓	1991	唐代庫頁島至堪察加半島の海上航線	中国航海 (1991年第2期)
[23]	論文	台湾	近	王鉞	1993	俄国和日本对庫頁島の爭奪	国立政治大学民族學報 (20期)
[24]	書籍	大陸	史	石栄璋	1994	庫頁島志略 (任国緒編「宦海伏波大事記：外五種」に復刻収録)	黒龍江人民出版社
[25]	論文	大陸	史	王德厚	1994	清政府对庫頁費雅喀人の轄治及有関問題	中国辺疆史地研究 (第2期)
[26]	論文	大陸	史	楊鳴	2000	明清時期中華服飾經由黒龍江下游及庫頁島地区東伝北海道の研究 ：北海道“蝦夷錦”考察紀行	黒河学刊 (2000年第4期)
[27]	随想	大陸	史	柳成棟	2000	読《庫頁島志略》の啓示	黒龍江史志 (第4期)
[28]	論文	大陸	史	楊鳴、柳嵐	2001	有清一代中華服飾經由黒龍江及庫頁島地区東伝北海道溢彩	黒龍江社会科学 2001年 (第6期)
[29]	概説	大陸	近	李凡	2002	日蘇“北庫頁島利権”之爭	南开學報 (哲学社会科学版) (2002年第1期)
[30]	概説	大陸	史	高福順	2002	庫頁島の地理発見と日俄对庫頁島の爭奪	長春師範学院學報 (第21卷第1期)
[31]	論文	大陸	史	刁書仁	2002	論清朝对東北辺疆各族的管理体制	史学集刊 (2002年第4期)
[32]	論文	大陸	史	楊鳴、李楠	2005	永寧寺碑文銘刻の奴兒干都司与黒龍江下游・庫頁島の先居民族関系	博物館研究 (第4期)
[33]	論文	大陸	民	張松	2006	黒龍江下游及庫頁島諸民族中の學生子崇拜	黒龍江民族叢刊 (2006年第6期)
[34]	論文	大陸	文	王業	2008	契訶夫《薩哈林島》关键词解説	語文学刊 (2008年第1期)
[35]	概説	大陸	近	喬原傑	2010	日本殖民統治下の薩哈林朝鮮人研究	黒龍江史志 (2010年第5期)
[36]	概説	大陸	近	邱建群	2010	美、日爭奪北庫頁島石油資源の歴史回	黒龍江社会科学 (2010年第2期)
[37]	論文	大陸	近	杜穎	2010	関于日本遺孤与中国養父母の関系問題 ：兼对中国日本遺孤与俄薩哈林日本帰国者作比較研究	西伯利亞研究 (第37卷第6期)
[38]	随想	台湾	近	王輔羊	2012	我們的失地：廟街、海參崴、伯力、江東六十四屯、庫頁島	中国辺政 (192期)
[39]	論文	台湾	近	楊素霞	2012	日露戰爭期における日本帝国の樺太植民地化への眼差し ：志賀重昂の地理学知識を通して（日本語）	政大日本研究 (第9号)
[40]	概説	大陸	史	李東旺	2013	庫頁島春秋	文史精華 (第3期)

番号	形態	刊行地	分野	筆者・翻訳者	刊行年	論文記事名（原著・原著者名）／書籍名	掲載誌（巻号）／刊行者
[41]	論文	大陸	近	杜穎	2013	戦后南薩哈林遺留日本人帰国問題浅析	西伯利亚研究 (第40巻第5期)
[42]	概説	大陸	史	柳成棟	2015	志鑑評価 石栄暉与《庫頁島志略》	黒龍江史志 (第18期)
[43]	概説	大陸	近	金永洵、孫徳俊、朴奉秀、楊彦鑫	2015	哈林韓国人の過去と未来（ママ）	赤子 (第7期)
[44]	概説	大陸	近	郭慧毅	2015	日俄争奪庫頁島之探析	文化學刊 (2015年12期)
[45]	論文	台湾	近	楊素霞	2016	植民地化初期の樺太経営策の模索 ：特別会計制という枠組みの中で（日本語）	台大日本語文研究 (第32期)
[46]	論文	台湾	文	劉淑如	2016	田山花袋小説中の植民地樺太与台湾的再現 ：以〈阿留夏〉〈真岡〉与〈山中巡査〉為例	高大人文学報 (第1期)
[47]	論文	台湾	文	劉淑如	2016	大鹿卓小説中の植民地台湾與樺太之再現 ：以《蕃婦》與《福壽草》為例	政大日本研究 (第13期)
[48]	論文	台湾	文	劉淑如	2017	日本帝國保障占領下北樺太亞港的流離再現 ：大鹿卓小説〈夜霧〉書寫的時代意涵	台灣日語教育學報 (第28期)
[49]	論文	台湾	近	楊素霞	2017	原敬の内地延長主義とその実現 ：台湾と樺太の植民地統治機構の構築（日本語）	臺大日本語文研究 (第34期)

出典）筆者作成。

注）「分野」：史＝前近代・歴史一般、近＝近代史、文＝文学（史）、民＝民族学・文化人類学。